世界文学鑑賞辞典

III ドイツ

北欧 中欧

早稲田大学教授
小口 優 編

東京堂出版

世界文学鑑賞辞典

III ドイツ 北欧 中欧

小口 優 編

東京堂出版

編者略歴
一九〇七年　栃木県烏山町に生まれる
一九三〇年　早稲田大学文学部独文学科卒
一九三二年　逝去
著書　「新ドイツ文法」
訳書　クンドルフ「ゲーテ」、エッカーマン「ゲーテとの対話」、フンボルト「或る女友達への書簡」。

世界文学鑑賞辞典
ドイツ・北欧・中欧編　定価二三〇〇円

昭和三七年一〇月三〇日　初版発行
昭和五四年八月三〇日　一〇版発行

編者　小口優
発行者　岩出貞夫
印刷所　図書印刷株式会社
製本所　渡辺製本株式会社

発行所　株式会社　東京堂出版
東京都千代田区神田錦町三ノ七（〒一〇一）
電話　東京　三二三一二六四一　振替　東京　二一二六

1597—137053—5164
© Masaru Oguti 1962

序文

文学への接近は美的感動に発し、文学の理解は作品の鑑賞にはじまる。近年、読者の量と質がいちじるしく増加向上してくるにつれて、外国文学の紹介・翻訳もまたおびただしい。それらの芸術的所産を目の前にして、あれこれと立ち迷うことなく、これを心の教養として素直に受けいれ、さらに独自の創造へ転化するのが好ましい。そのためには、それ相応の準備と操作が必要であり、指針として、文学の歴史と理論と批評にもとづく鑑賞が要求される。

『世界文学鑑賞辞典』全四巻はこの要求にこたえて、文学的教養から創造へのかけ橋ともなるように意図されたが、もとより文学の鑑賞はつねに作品と読者の相対的関係にあって、これが唯一のものと限定されるべきではない。編者は鑑賞の主観的独断におちいることをおそれて、項目の執筆にはそれぞれの専門家を依頼し、最近の研究・学説を十分にとり入れた学問的基盤に立った上で、客観的な評価の決定にいたる、作品鑑賞の態度と方法と基準とを提供しようとした。

『世界文学鑑賞辞典』はわが国の慣用にしたがって、もっぱら西洋文学を対象とし、歴史的には上代ギリシア、ローマの文学から第二次大戦後の最近の文学まで、詩歌・小説・戯曲・評論・随筆・伝記等のすべてのジャンルをふくめ、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、ロシアはもとより、北欧、中欧、南欧にわたっている。輝しい文学的所産を可能なかぎり正しい姿で伝えるために、その作品の成立・刊行に関しては必要な場合は文献学的解説を、小説、戯曲、叙事詩等のプロットについては梗概を、作品の創作動機、主題の解明、文体の特質、創作過程の心理的様相、社会的・文化史的意義などを鑑賞としてそれぞれ記述し、作者小伝を附して、文学的知識と文学的鑑賞の統一にも力をそそいだ。

編者のもっとも苦心したのは、この種辞典の生命ともいうべき作品項目の選定であった。すでにこれまで名著解題、名作辞典のたぐいには、アメリカの例をとればフランク・マギル『世界文学傑作解題』、ヘレン・ケラー『名著解説』、ローランド・グッドマン『名作小説梗概百篇』、ヴァン・カートメル『名作戯曲梗概百篇』等があり、それらを参照するかたわら、もっぱらわが国における条件を考慮し、一般読者に親しみ深い作品を中心に、文学史的意義ある、価値高い作品を採り上げ、年代順にこれを見れば、作家・作品を通じての、文学の史的な流れを概観できるような意図もふくめている。

編者の意図がどこまで達せられたかは大方の批判をまつほかはないが、時日と紙数、当今の出版事情といった外的な条件はあったものの、編者が最善・細心をつくして、なお物足らぬ不安があり、多くの不備や誤りは免れない。御教示、御叱正を得て、今後機会あるたびに訂正増補につとめるのは、編者の当然の義務であろう。

『世界文学鑑賞辞典』が一般読者にとって文学理解への手引き、教養への一助ともなり、教授者の参考、専門家諸氏の忘備ともなり得れば、この辞典の目的は達しられたものと言わねばならない。

刊行に当って、東京堂取締役出版部長・増山新一氏、編集課長・石井良介氏、編集部・西哲生氏をわずらわせるところ大きく、感謝申し上げる。

一九六二年五月五日

鈴木幸夫
根津憲三
小口優
黒田辰男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

はしがき

『世界文学鑑賞辞典』ドイツ・北欧・中欧編は前掲の序文のなかに述べられた本辞典編纂の目的と方針にしたがい、ドイツ文学・北欧文学・中欧文学から、わが国の一般読者にとって興味深くかつ価値ありと思われる作品二一四編を選び出し、作品内容を正確に紹介するとともに、作品の正しい理解・玩味に必要な事柄を摘記し、読者がみずから作品に接する際の参考に供した。

編者がもっとも苦心したのは作品項目の選定であった。問題をドイツだけに限っても、その文学的伝統は長く、名著・傑作と称せられるものの数はおびただしく多い。それらをことごとく網羅することは、紙面が限られていて、とうてい許されない。そこでどうしてもなんらかの規準を設け、このおびただしい作品のなかから一定数の作品を選び出さねばならない。編者が作品選択に当たって採用した規準は次の三つである。一、幾度かわが国語に翻訳され、多くの読者を持ち、言わばすでに日本文学のなかに揺るぎない座を占めている作品。二、まだ邦訳されていないが、その名はわが国にもよく知られている一流作家の代表的作品。三、翻訳も紹介もまだ十分行なわれず、したがってわが国ではあまり知られてはいないが、戦後ヨーロッパで問題になった注目すべき作家の代表的作品。第一の規準に従ってゲーテ一二編、シラー八編、ヘッセ七編、トーマス・マン、カロッサ各六編、クライスト、ハイネ、ヘッベル、グリルパルツアー、シュトルム、ハウプトマン、イプセン、ストリンドベルク各五編の採用を決定したが、本国ではたとえどんなに有名でもわが国ではほとんど知られていない、たとえばクロップシュトックのような作家の作品は全く無視せざるをえなかった。同一作家の作品中から選択する場合にも、同じ規準が適用された結果、すでにわが国に翻訳され、一般読者に親しまれている作品に優先権が与えられた。たとえばジャン・パウルからは彼の諸大作をさしお

いて短編『ヴッツ先生のたのしい生涯』が選ばれ、ホーフマンスタールの場合にも彼の数ある作品のなかから『痴人と死』が選ばれた。第二の規準は第一の規準の適用によって起こった選択の不公正・不均衡をいくらかでも是正するために設けられたもので、これによってヴォルフラムの『パルツィヴァール』、ヴィーラントの『アーガトン物語』など、かなり多数の作品が拾い上げられ、更に第三の規準によってデープリン、ブロッホ、ムージル、ベルゲングリューン、リッセなどの代表作がこれに追加された。編者は最初狭義の文学作品ばかりでなく、研究・評論・随筆・自伝・紀行・語録・書簡・日記・談話などでも文学的に価値あるものは採用するつもりでいたが、紙数の制限のためこの種のものはごく少数しか採用できなかった。詩集の類も同様である。

本編の各項目はそれぞれ専門の学者や研究家に頼んで執筆していただいた。早稲田大学教授　山崎八郎、中村英雄、志波一富、中村浩三、助教授　山田博信、加藤真二、戸室博、高木実、大木健一郎、愛知学院大学助教授　榎本重男、早稲田大学講師　山田広明、重原淳郎、桒田光行、新井靖一、早稲田高等学院教諭　中村利治、大学院博士課程在学　柴田健策、有賀健、入野田真右、助広剛、神崎厳、降旗祐子、大学院修了　中村睦子、中村皓光、中村友美の諸氏は編者の要請にこたえ、この仕事の完遂に惜しみなく力をかしてくれた。ことに編者は執筆者との連絡、原稿整理、校正、索引作成その他において編者を助けてくれた柴田健策氏の好意を忘れ得ない。本書がかくも短日月の間に予期通り完成したのはひとえにこれらの人々の協力のおかげである。ここに記して感謝の意を表したい。

本書がドイツ・北欧・中欧文学に対する興味を喚び起こし、その正しい理解と味得に役立ち、あるいは更に専門的研究へ進む階梯となりうるならば、編者並びに執筆者にとってこの上ない喜びである。

一九六二年一〇月三日

小口　優

凡例

▽本書は、古代から現代にいたる、ドイツ文学・北欧文学・中欧文学の作品、二一四をえらび、各作品に鑑賞をほどこすことを主眼とした。

▽小説・戯曲の場合は、〔梗概〕を設け〔鑑賞〕の一助とした。作品集（詩集・童話集など）を項目とした場合は、その中の代表的な作品を取りあげて解説・鑑賞をほどこした。

▽項目は、各作品を五十音順に配列した。作家名の方から作品を検出するときは、巻頭の作家別項目表または巻末の人名索引から検出する。

▽見出しは、作品名（邦訳名）であらわし、以下、原書名、発表年代、作者名、作者原名、作品形態、の順にしるした。

▽作品の邦訳名は、一般に通用している訳名のある場合には、できるかぎりそれを採用した。幾とおりかの訳名が用いられている作品には、それらの訳名をもあげて、検出のための便をはかった。

▽各作家の略伝は、作品のあとに〔作者〕として付し、略歴および主要作品などをあげるにとどめた。ただし一作家で二作品以上収載した場合の略伝は、そのうちの一作品をえらび、その末尾に付した。たとえば、シュトルムの場合、『みずうみ』『三色すみれ』『溺死』『人形つかいのポーレ』『白馬の騎者』を収めたが、その略伝は『みずうみ』の項の末尾に付した。

▽引用文は、訳者名を明記した場合、原則として訳文のままにした。詩の引用は、∧ ∨で示した。とくに代表作品を解説・鑑賞するときは、これを別行に示し、∧ ∨ははぶいた。

▽表記については、当用漢字・現代かなづかいによったが、難読の語など、やむを得ぬものにはルビを付し、読みやすくすることにつとめた。

▽作品名・人名・地名などのカタカナ表記は、原則として、その国の呼びかたによってしるしたが、慣用の固定しているものは、それに従った。ただし、ヂ・ヅ・ヰ・ヱ・ヲ、はそれぞれ、ジ・ズ・イ・エ・オ、と改めた。

▽作品名・書名・雑誌名・新聞名には、すべて『　』をつけた。

▽本文中に＊印のある作品名は、独立項目として収録されていることを示す。

▽索引は、「人名索引」と「作品・事項索引」とに分けた。

▽五十音順配列の順序の細部は、すべて長音・濁音・半濁音を無視して配列した。また促音・拗音および発音をおぎなうためのカタカナ小文字は、一音とした。

▽おもな符号は、次のとおりである。　↓（を見よ）　～（何年から何年まで）　？（年代不明）

世界文学鑑賞辞典

ドイツ・北欧・中欧編

作家別項目表（五十音順）

△印は、二作品以上収録した場合に、〔作者〕略伝をつけた作品を示す。

（ページ）

アイヘンドルフ
「楽しき放浪児」……一七四
アンツェングルーバー
△「キルヒフェルトの牧師」……九二
「偽誓農夫」……八九
アンデルセン
「即興詩人」……一五九
△「童話集」……二〇二
「絵のない絵本」……一五六
イプセン
△「人形の家」……二二二
「幽霊」……二九九
「民衆の敵」……二八五
「野鴨」……二二七
「ヘッダ・ガブラー」……二六〇
インマーマン
「エピゴーネン」……一五七
ヴァーグナー
「さすらいのオランダ人」……二八
「タンホイザー」……一八三
△「ローエングリーン」……二二八
ヴアッサーマン
「クリスチアン・ヴァーン
シャッフェ」……九八
ヴィーヒェルト
「単純な生活」……一八〇
ヴィーラント
「アーガトン物語」……三
ヴェーデキント
「春のめざめ」……二三六
ヴェルフェル
「鏡人」……九〇
ヴォルフ
△「マムロック教授」……二七一
「国境のふたり」……一一三
ヴォルフラム・フォン・エッ
シェンバハ
「パルツィヴァール」……二三三
エッカーマン
「ゲーテとの対話」……一〇三
エーブナー＝エッシェンバハ
「村の子」……二九二
カイザー
「朝から夜中まで」……一一
△「平行」……二五七
カザック
「流れの背後の町」……二一五
カフカ
△「変身」……二六三
「審判」……二二九
「城」……二二七
「アメリカ」……一六
カロッサ
△「ドクトル・ビュルガーの
運命」……二〇六
「幼年時代」……二〇五
「青春変転」……二五〇
「医師ギオン」……二九
「成年の秘密」……二五一
「美しき惑いの年」……四七
クライスト
△「こわれがめ」……一一七
「ペンテジレーア」……二六四
「ハイルブロンの少女ケー

トヒェン」……三三八
「公子フリードリヒ・フォン・ホンブルク」……一〇九
「ミヒャエル・コールハース」…二六四
グラッペ
「ナポレオン」……三一七
グリム
「童話集」……二〇一
グリルパルツァー
△「祖妃」……一六〇
「ザッフォー」……一一〇
「金羊毛皮」……九三
「海の波・恋の波」……一五三
「ウィーンの辻音楽師」……四一
グリンメルスハウゼン
「阿呆物語」……一二五
ゲオルゲ
△「魂の一年」……一一七
「生の絨毯」……一一三
ケステン
「異国の神々」……一一七
ケストナー
「エミールと探偵たち」……六一
△「ファービアン」……一三〇
「二子のロッテ」……一五二
ゲーテ
「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」……一〇二
△「若きヴェルターの悩み」……三三一
「タウリス島のイフィゲーニェ」……一六八
「エグモント」……一五五
「タッソー」……一七一
「ヴィルヘルム・マイスター修業時代」……三八
「ヘルマンとドロテーア」……二六二
「親和力」……一四〇
「詩と真実」……一二八
「イタリア紀行」……三〇
「ヴィルヘルム・マイスター遍歴時代」……四〇
「ファウスト」……二四五
ケラー
△「緑のハインリヒ」……二八二
「村のローメオとユーリア」……二九四
ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク
「トリスタンとイーゾルト」……二一〇
コルベンハイヤー
「神を愛す」……八二
ザルテン
「バンビ」……三九
△「白馬物語」……三三一
シェンキェヴィチ
「クォ・ヴァディス——ネロ時代の物語」……九五
シャミッソー
「影を売った男」……七八
ジャン・パウル
「ヴッツ先生のたのしい生涯」…四九
シュティフター
「男やもめ」……六八
「水晶」……一四二
△「晩夏」……三三七
シュトラウス
「いのちの十字路」……三三
シュトルム
△「みずうみ」……二七八
「三色すみれ」……一二三
「溺死」……一四四
「人形つかいのポーレ」……二二二
「白馬の騎者」……二二〇
シュニッツラー
「アナトール」……一四
「恋愛三昧」……二一七
「緑のおうむ」……二八一
△「女の一生(テレーゼ)」……七二
シュピリ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「アルプスの山の娘」……三
シュミットボン
「街の子」……二六八
シラー
△「群盗」……一〇〇
「フィエスコの反乱」……二五一
「たくらみと恋」……一七〇
「ドン・カルロス」……二二二
「ヴァレンシュタイン」……二二五
「オルレアンの乙女」……七〇
「メッシーナの花嫁」……二九六
「ヴィルヘルム・テル」……二七
ジラヒ
「瀕死の春」……二四三
ズーデルマン
「憂愁夫人」……二九八
ストリンドベルク
△「島の農民」……一三三
「父」……一八六
「令嬢ジュリー」……二二五
「死の舞踏」……一三二
「ダマスクスへ」……一七八
ゼーガース
「死者はいつまでも若い」……二二五
チャペック
「虫の生活」……二六八
ツヴァイク
「アモック」……一八
△「女の二十四時間」……七四
「ジョゼフ・フーシェ」……一二六
「マリー・アントワネット」……二七四
ツックマイアー
「楽しいぶどう山」……一七三
「ケーペニクの大尉」……一〇六
△「悪魔の将軍」……八
ティーク
「長靴をはいた牡猫」……二二四
デープリン
「アレクサンダー広場」……二三
トーマ
「悪童物語」……五
トラー
「どっこい、おいらは生きている」……二〇七
ドロステ＝ヒュルスホフ
「ユダヤ人のぶなの木」……二〇一
ニーチェ
「ツァラトゥストラはかく語った」……一八九
ノヴァーリス
△「夜の讃歌」……二〇八
「青い花」……二
ハイゼ
△「片意地娘」……八一
「忘られぬ言葉」……二二三
ハイネ
「ハールツ紀行」……二二四
△「歌の本」……四六
「ドイツ・冬物語」……一九八
「アッタ・トロル―夏の夜の夢」……二二
「ロマンツェーロー」……二二〇
ハウフ
「隊商」……一六一
ハウプトマン
「日の出前」……二四〇
「寂しい人たち」……二二
△「織工」……六九
「海狸の毛皮」……五一
「沈鐘」……一八七
ハムスン
「飢え」……四三
ハルトマン・フォン・アウエ
「哀れなハインリヒ」……二五
ハルペ
「青春」……一四八
ビューヒナー
「ダントンの死」……一八一

ビュルガー
「ほら男爵の冒険」……二六六
ビョルンソン
「アルネ」……二〇
フォンターネ
△「罪なき罪」……一九一
「迷路」……二九五
フケー
「水妖記」……一四三
フーフ
「ルードルフ・ウルスロイの回想」……三一三
フライターク
「貸し借り」……七九
ブレヒト
「三文オペラ」……一二四
ブレンターノ
△「ゴドヴィ」……一二五
「ゴッケル物語」……一二四
ブロッホ
「夢遊病者たち」……二九〇
ヘッセ
「ペーター・カーメンツィント」……二五九
「車輪の下」……二三四
「クヌルプ」……九七
△「デーミアン」……一九五
「荒野の狼」……一一〇
「ナルチスとゴルトムント」……二一九
「ガラス玉演戯」……八四
ヘッベル
△「ユーディット」……三〇二
「ゲノフェーファ」……一〇五
「マリア・マグダレーネ」……一七二
「アグネス・ベルナウエル」……六
「ギーゲスとその指輪」……八七
ベルゲングリューン
「大暴君と裁判」……一六五
ヘルダーリン
△「ヒュペーリオン」……二四二
「エンペードクレス」……六三
ホフマン
「黄金宝壺」……六五
「悪魔の霊液」……一〇
「スキュデリー嬢」……一四四
△「牡猫ムルの人生観」……六六
ホーフマンスタール
「痴人と死」……一八四
ボンゼルス
「ミツバチ・マーヤの冒険」……二八〇
マイヤー
△「フッテン最後の日々」……二五三
「ユルク・イエーナッチュ」……三〇四
「聖者」……一四七
「僧の婚礼」……一五七
マイヤー＝フェルスター
「アルト・ハイデルベルク」……一九
マン（トーマス）
△「ブッデンブローク一家――一家の没落」……二五五
「トニオ・クレーガー」……二〇九
「ヴェニスに死す」……四四
「魔の山」……二六九
「ヨゼフとその兄弟たち」……三〇六
「ファウスト博士」……二四八
マン（ハインリヒ）
「ウンラート教授」……五三
ムージル
「特性のない男」……二〇四
メーリケ
△「画家ノルテン」……七六
「旅路のモーツァルト」……一七六
モルナール
「リリオム」……三一一
ヤコブセン
「ここにバラあらば」……一一三
△「マリー・グルッペ夫人」……二七五
ユンガー

「大理石の断崖の上で」……一六七
ラーゲルレーヴ
「地主の家の物語」……一三〇
△「エルサレム」……六二
ラーベ
「雀横丁年代記」……一四五
リッセ
「大地の揺れるとき」……一六三
リルケ
△「時禱集」……一二七
「マルテの手記」……一二七
「ドゥイノの悲歌」……二〇〇
ルートヴィヒ
△「世襲山林監督」……一五六
「一難去ってまた一難」……三三
「天と地のあいだ」……一九七
レイモント
「農民」……二三五
レッシング
「ミンナ・フォン・バルンヘルム——兵士の幸福」……二八七
△「エミリア・ガロッティ」……五九
「賢者ナータン」……一〇七
レマルク
△「西部戦線異状なし」……一五四
「凱旋門」……七五
「愛する時と死する時」……一
作者不明
「ニーベルンゲンの歌」……二三〇
「ラインケ・キツネ」……二三〇
「ティル・オイレンシュピーゲル」……一九三
「カレワラ」……八六

あ

哀愁のモンテカルロ　→女の二十四時間（七四ページ）

愛する時と死する時（あいするときとしするとき）　Zeit zu Leben und Zeit zu Sterben (1954)　エーリヒ・マリーア・レマルク Erich Maria Remarque　長編小説

【梗概】「死は、ロシアではアフリカとは違った臭（にお）いがする。」という言葉でこの物語は始まる。熱砂のアフリカから雪のロシア大平原に至るまで、全欧州はナチスの砲火と残虐行為のために廃墟と化し、死臭におおわれている。前進に前進を続けてきたドイツ軍は押し返され始めた。ドイツ兵たちはとまどい、困惑し、どこからともなく無尽蔵にくり出される大砲と、戦車と、敵機のために寸断された戦線を立て直す暇もなく、ロシアの大平原で後退に後退を続ける。兵士たちは疑いだし、不安になり、ゲシュタポのスパイにもかかわらず彼らの話はいよいよ大胆になり、絶望的になる。主人公の若い兵士エルンスト・グレーバーは全欧州を転戦した古参兵で、戦争と、戦争の未来に対し絶望的な疑惑と不信に陥っている。壊乱寸前に、彼は三週間の暇を得て、故国の両親の家に向かって帰途につく。死と荒廃の地獄から、しばらくのがれて、古い、平和な、夜も明るい故国の市の父母の家で、独りで最も重大な問題を考えてみたいと願う。だが、彼が着いた市は、燈火管制の闇に包まれ、焼け跡の臭気におおわれており、父母の家はむざんな廃墟となり、父母の消息もわからない。昼夜を問わず空襲があり、市民は死の不安と、ゲシュタポの暴虐の恐怖に萎縮し、猜疑（さいぎ）と不信の殻に閉じこもっている。この死と恐怖の市をむなしく父母の消息を求めて彷徨するグレーバーは、母校を訪れる。母校は青年への裏切りの象徴のように思われる。一人信頼できる旧師ポールマンは母校を追われ、ゲシュタポの監視下に置かれている。女スパイに監視されながら、強制収容所に入れられている父を救うために、爆撃の的となっている軍需工場へ勤労奉仕に通っているエリザベートと、明日は戦地に帰って行かねばならぬグレーバーとの間に、激しく清純な恋が燃えあがる。二人の恋の唯一の憧憬は、平和で、謙虚で、単調で、一様な「牝牛の幸福」、彼らの親たちや祖父母たちが「牝牛の幸福」として軽蔑していた平凡な幸福であった。グレーバーの重大な問題、「一切が終わったとき、一体どうなります？　どうなるんです？　新たにやり始めるだけのものが十分生きているのでしょうか？」この恐ろしい問いに、ポールマンは「一

時、自分の国に失望したら、世界を信ずるのだ。日蝕はありうる。だが永久に続くものではない。この地球上では人間はあっさり絶望に屈して、安易に片づけてはならないのだ。」という。このボールマン先生もゲシュタポについにとらえられる。信ずることのできない戦争のために、最も愛しい、一番大切なものを捨てて、再び戦地に戻ったグレーバーは、彼が逃がしてやったロシア人の捕虜の一人の、ふとした気まぐれのために、何ということもなくむなしく死ぬ。

【鑑賞】 この作品は処女作『西部戦線異常なし』以来第七作に当たる。作者は前後七巻のロマンによって、第一次大戦から、まさに全欧州の恐るべき夢魔であったヒットラー政権の崩壊に至る三〇年の時代の推移と、時代時代の運命に追いつめられた民衆の苦悩を、すぐれた芸術的構想力をもって、歴史的絵巻に描き上げた。この作品では再び処女作のテーマを第二次世界大戦に移し、ロシア大平原の戦線と、爆撃で廃墟と化したドイツの一都市を舞台にして戦争の悲惨を訴えている。(中村利治)

〔作者〕 ↓一五四ページ『西部戦線異状なし』

愛と死の遍歴 ↓ナルチスとゴルトムント(二一九ページ)

青い天使 ↓ウンラート教授(五三ページ)

青い花(あおいはな) Heinrich von Ofterdingen(1802)

ノヴァーリス Novalis 長編小説

【梗概】 ハインリヒは夢で、優しい乙女の顔に変わる青い花を見る。不思議なおもいは、父も若いとき同じ夢を見たことがあると聞いて一層強まり、この花を見たいというあこがれは、もはや片時も彼の念頭から離れない。彼は二〇歳のとき、世間を知るため、母とともに、北の故郷アイゼナッハを離れ、南のアウグスブルクの祖父のもとへ旅立つ。彼は同行の旅商人たちから詩や文学の話、アリーオンやアトランティスの童話を聞いて驚き、畏敬・勇気の体験をえ、十字軍の城に捕えられている東方の少女ツリーマを見て、同情の力を喚起され、ある鉱夫からは無私と内面の自由が必要なことを教わる。鉱夫は彼をある洞窟へ連れて行く。ここに隠棲しているホーエンツォレルン伯から、彼は歴史記述の意味、神と運命の摂理に対する畏敬と信頼を知り、自分の全生涯の書かれた本を発見する。こうして詩人的成熟への体験を経た後、一行はついにアウグスブルクに到着する。祖父のもとで彼は詩人クリングスオールと、その娘マティルデと相知り「昇る太陽へ傾く百合」のような彼女の顔が、夢に見た青い花と、洞窟の本にあった肖像と同じであることを思い出す。愛は二人を婚約させる。ふたたび現実から夢に移る。マティルデは舟をこいでいる。突然彼女はおぼれそうになるが、それでも微笑(ほほえ)んでいる。助けようとした彼も一緒に青い流れの下に沈む。と、彼女が

秘密の言葉をささやく。この声で彼は夢からさめ、自分の全存在を貫き響いていたその声を失った。クリングスオールは自作の童話で二人の結婚を祝う。そこでは幻想が無限にからみ、エロース（愛）とファーベル（寓話）が兄妹に、フライヤーとエロースが恋人同志となり「各人がすべての中に、すべてが各人の中に生きている。」そして「大きな秘密がすべての者に開示された。だが永遠にきわめられないままである。」「期待」と題された第一部は、こうして童話で終わる。「実現」と題された第二部は未完の断片で、そこでは世界と霊界との境ははずされ、愛人の死後巡礼となったハインリヒに、マティルデが現世における伴侶としてツィアーネという少女を与え、死んだマティルデと彼は話し、ツィアーネの養父の老庭師ズィルヴェスターとの会話の途中で切れている。

【鑑賞】この小説の原名でもあり主人公の名前でもあるハインリヒ・フォン・オフタディンゲンは、ヴァーグナーのタンホイザーで有名な中世の職匠詩人で、作者はその伝説と、自分の郷里に伝わる奇跡の花の伝承から、この小説を書く外的刺激を受け取った。また全く散文的で奇跡も神秘もない芸術的無神論としてゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』に、反発を感じた作者は「無限なものから有限なものへの移行歴」をこれで書こうとしたと言っている。作者の意図は、自分の魂の内的諸条件からこの作を作ることにあった。二つの夢が青年の心に、詩人的生活の神秘的幸福を予感させ、青い花の形で彼の愛を予示し、いろいろな経験の後、マティルデの中に青い花を見出すまでの成熟の過程を描いたこの作の根本モティーフは、浪漫的憧憬に満ちた詩人精神の聖化である。ここでは夢と童話の間で無限から有限への移行が起こり、夢が世界に、世界がふたたび高次の夢となり、青い花は、夢、童話、運命、高次の夢として、それ自身、遍歴であり過程となっている。こうして内的認識の変遷を描くこの作では、当然ながら人物や場所の現実的性格づけや、歴史的背景、劇的高まり、小説的緊張の効果は故意に放棄され、外的筋も最小限に単純化されている。読者はこうした作者の意図にしたがって読まねば、失望するだろう。この作品は、二九歳で夭折した作者の、数少ない、ほとんどが断片の作品中唯一の大作であり、浪漫主義の典型的作品と見られ、青い花は浪漫主義を象徴する言葉とまでなっている。（粟田光行）

〔作者〕→三〇八ページ『夜の讃歌』

アーガトン物語（アーガトンものがたり） Die Geschichte des Agathon (1767) クリストフ・マルティーン・ヴィーラント Christoph Martin Wieland 長編小説

【梗概】アーガトンは美貌の青年詩人で、プラトン流の処世観を持ち、徳と愛の一致を理想とし、故郷アテネにおいてその実現に熱中する。しかし事志と違い、追放され、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.